

レジリエンスと突発的エピソード

島田 周平(東京外国語大学大学院総合国際学研究院)

2011年3月11日に起きた東日本大地震は、数世紀に一度起きる大地震であった。この経験は、数世紀に一度しか起きない非日常的災害も、起きる時は起きるという至極当然な事実を我々に突きつけた。そして今、数世紀に一度起きるかもしれない他の大地震による震災の「想定」内組み込み作業が進められている。

発表者は長らく、アフリカ農村部における農業生産や農村社会の脆弱性増大という問題に取り組んできた。それは、アフリカの農民・農村社会が、年変動が大きい環境変動のインパクトにどのように対応しているのかという疑問から出発していた。天水依存の農業を営むアフリカの農民は、作物選択はもちろん、耕作形態、土地所有、労働慣行、収穫物の分配方法、出稼ぎなど様々な行動、組織、制度で、多雨や小雨、虫害等による農業生産の変動に対処してきた。しかしながら、アフリカの農業生産は、1980年代以降、社会経済環境の変化の影響も大きく受けるようになってきた。構造調整計画の導入や政治の民主化の推進に代表される社会経済的变化は、アフリカの農業生産のみならず農村都市関係にも変化をもたらし、農民の脆弱性を増大させてきているのではないかと、というのが発表者の問題意識をより強固なものにしていた。時あたかも、地域の環境問題を経済社会問題と関連づけて総合的に捉える必要性を説くポリティカル・エコロジー論が同様の問題意識から多くの研究成果を上げ始めていた時でもあった。

この脆弱性研究の延長線上で、アフリカ農村社会のレジリエンスといった問題も研究課題として浮かび上がってきた。脆弱性増大は、農民の自然資源へのアクセシビリティの減少と捉えられるのに対し、レジリエンスはそのアクセシビリティの回復力と捉えることができる。この意味で、両者はアクセシビリティの変化を一連の時間的プロセスの中でみた場合に、悪化と回復という別の局面を意味しているように思われる。しかし、脆弱性増大の過程においてもそれを防ごうとする回復力は常に働いており、逆に回復の過程でも脆弱性増大に転じる契機は常に存在するので、両者はコインの裏表のような関係にあると捉える方がむしろ正しいかもしれない。したがって、脆弱性増大について考えることは必然的にレジリエンスを考えることにもなるといえる。

本報告では、そのようなアフリカ農村部における農民・農村社会の脆弱性増大をめぐる諸議論を紹介した上で、私がこれまでザンビアの農村で調査してきた事例をもとに、農村社会のレジリエンスについて考えるところについて先ず述べ、そのあとに今回の東日本大地震による被災地社会のレジリエンスについて現在私が考えている点について述べてみたい。数年から10数年のオーダーで起きる突発的自然災害と、数世紀に一度のオーダーで起きる災害との決定的違い、さらには農民にとって基本的な自然資源である土地の被災状況の違いなど、比較検討するには両者の自然的変異のレベルの違いはあまりに大きい。このため、アフリカ社会の脆弱性・レジリエンス研究が今回の震災地のレジリエンス研究にどれほどの意味がありうるのか心許ないところがある。しかしながら、これまで脆弱性論の中で議論されてきた「突発的エピソード」に関する研究を足がかりに、東日本の被災地のレジリエンスについて私が現在考えているところを明らかにしてみたい。